

序

現在、循環器診療において、画像診断は欠かせない検査のひとつとなっています。技術の進歩により、多くの情報が得られるようになり、診断の精度も向上しました。また、適応となる疾患も多く、虚血性心疾患、心筋症、不整脈など適応も拡大しています。進歩に伴って学ぶべきことが増え、循環器画像診断は難しく感じることもあるかもしれません。

本書は、循環器疾患の診断・治療における画像診断の活用方法を、医学生や専攻医の先生方にもわかりやすいよう、一問一答形式でシンプルに解説することを心がけました。また、最新のガイドラインや疾患概念も含んでおり、専門医の先生方にもご活用いただける内容になっています。執筆者は、放射線科医だけでなく、循環器内科や血管外科の先生方にもお願いし、実際のカテーテル治療や手術の視点も取り入れることで、より臨床に役立つ内容となるよう工夫しています。なるべく多くの画像やイラストを組み入れることで、視覚的・直観的に理解できるように構成しました。

扱う画像診断モダリティも、CT、MRI、核医学検査を含め、さまざまな検査を幅広くカバーしており、日々の検査業務や読影にも活用できる一冊になっています。本書が、皆様の診療や学習に役立つことを願っています。

最後になりましたが、大変ご多忙の中、執筆していただいた先生方に深く感謝申し上げます。

横浜市立大学大学院医学研究科放射線診断学教室

加藤 真吾

推薦のことば

私が加藤真吾先生に初めて会ったのは、彼が三重大学放射線医学教室に国内留学して、心臓MRIの勉強に勤しんでいたときの日本心臓血管放射線研究会でした（当時の私は熊本大学に所属していました）。その国内留学中の成果として、彼の論文がトップジャーナルであるJ Am Coll Cardiol誌に採択されました¹⁾。優秀な若手研究者が出てきたことに刺激を受け、謙虚で前向きなその姿勢に敬服したのを覚えています。そして、その頃彼は循環器内科医でしたが、循環器領域にとどまらず、放射線診断全般について深く勉強していたのです。

時は流れ、2019年のCOVID-19前夜ともいえる時期に私は横浜市立大学に着任しました。そこで、循環器内科医として神奈川県立循環器呼吸器病センターの診療にあたる加藤先生と約10年振りに再会しました。当教室の大学院生の指導を手伝ってもらうことになり、徐々に一緒に研究活動を行う未来が感じられるようになりました²⁾。彼には2つの選択肢がありました。ひとつはこれまで通り循環器内科専門医として、もうひとつは新たに放射線診断専門医を取得して循環器画像診断をきわめていく未来です。加藤先生は後者の道を選び、当教室に移籍し、放射線診断専門医の資格を取得しました。彼の選択を後押ししてくださった横浜市立大学医学部循環器・腎臓・高血圧内科学教室の田村功一教授、神奈川県立循環器呼吸器病センター循環器内科の福井和樹部長には、この場を借りて深く感謝いたします。

加藤先生は、本邦にはまだ少ない循環器内科専門医と放射線診断専門医のダブルライセンスを有する医師の一人です。加藤先生がまとめた本書は、そのバックグラウンドが存分に活かされています。循環器内科医、放射線科医のそれぞれの目線から生まれてくる、循環器画像診断に関する疑問を的確にとらえたところは特筆すべき点です。目次をみていただくとすぐにわかると思いますが、「ここを知りたかった」と感じるテーマがふんだんに取り上げられており、読み進めるにつれてその疑問が氷解していくことでしょう。

本書を手にとられている皆様においては、日々の診療のレベルアップとともに新たな診療、そして研究のアイデアにつながる体験ができるはずです。

2025年3月

**横浜市立大学大学院医学研究科放射線診断学教室
宇都宮 大輔**

- 参考文献** > 1) Kato S, et al: Assessment of coronary artery disease using magnetic resonance coronary angiography: a national multicenter trial. J Am Coll Cardiol 56: 983-991, 2010.
- 2) Kamide H, Kato S, et al: Impairment of right ventricular strain evaluated by cardiovascular magnetic resonance feature tracking in patients with interstitial lung disease. Int J Cardiovasc Imaging 37: 1073-1083, 2021.